



昨年度の四天王寺ワッソ

日本と東アジアの交流の歴史を再現するお祭り「四天王寺ワッソ」。今年も史跡・難波宮跡公園で11月1日、古代から中世にかけて日本に渡来した使節団の巡行や出迎え催事などを行う。1990年から続く秋の一大イベントだが、途中2年間、資金難で中止の危機に見舞われた。再開に向け奔走した一人が、大手電機メーカー勤務の棚橋清晴さん(59)だ。

“ワッソを守る”という特命

群馬勤務から再び大阪に戻った2001年、当時ワッソは存続が危ぶまれていた。支援企業の経営破綻で実行委員会は解散。目の前には「大量の衣裳や道具などを保管する場所の確保」という課題が立ちだかっていた。会社がワッソを関西文化にとって必要なものと感じていたため、着任早々に保管場所探しの任に当たった。

「保管できなければ廃棄。しかも期限が迫っている。『ワッソ』って何ですかという状態だったが、急いでビデオで勉強し、衣裳や道具などを見に行ったら。時代考証された立派な衣裳などがきちんと管理されていて、これはすごいと思った」

“オール関西的な事業”と気を引き締め「何としてでも破棄は避けなければ」と全力を挙げて保管場所を確保。緊急課題はクリアできた。続いて、関係各社・団体が集まって新たな実行委員会を作り、保管物の見学会やシンポジウムなども開催。2003年からの復活に向けて結束を固め、準備を進めた。

雨降って地固まる

ワッソの見ものは、高句麗や百濟、新羅など朝鮮半島からの使節団の巡行である。古代衣裳を身に付け、伝統楽器を鳴らす行列は圧巻の時代絵巻だ。2000年の第11回までは谷町筋を3500人が大巡行していたが、復活に向けて継続可能な形に縮小することに。場所は使節団が最初に上陸したとされる地、難波宮跡に移した。

新たにNPO法人「大阪ワッソ文化交流協会」も発足し、事務局長を任されることになった。「スタッフ同士の衝突もあり、いろんな問題を抱えて毎日パニック状態だった。それでも何とかせんとあかん。必死だった」。いよいよ迎えた当日。2年ぶりの再開に注目が集まる中、気合十分で会場に向かった。

しかし、太陽は雨雲に隠れたまま。無情な雨は止みそうにない。「中止の決断が下されたとき、皆おうおうと男泣きしました」。復活のときは持ち越しとなった。「雨降って地固まる」。そう気持ちを切り替え、万全を期して臨んだ1年後の2004年11月、晴れ渡った秋空の下で復活を果たした。

子どもたちの教育、大阪の発展に

今年は皆既日食年、世界天文年にちなんで、「環境・古代の知恵に学ぶ」をテーマに巡行を展開する。天文学・暦本・陰陽道を日本に伝えた観勒ら宇宙・自然・水などをキーワードにした人物を交え、1000人が練り歩く。有志の学生らは現在、「四天王寺ワッソアカデミー」で伝統楽器の演奏や舞を特訓中だ。府立高校の校長らも主な人物に扮して参加する。

職務の一環としてスタートし、8年あまり関わり続けているワッソだが、会社の任務以上にのめり込むのには理由があった。「子どもたちが汗を流して国際感覚を養える貴重な機会。大阪や日本がどのように発展したかというベースを、祭りを通じて伝えることに意義がある」と考えるからだ。

厳しい財政状況ではあるものの、「継続する価値のある事業」だと確信する。「祭りがビジネスに発展する時代。見て、参加して感動した気持ちを一人一人が継承していくことが、大阪の発展にもつながるはず。大阪のブランドとして、これからも大切に守っていきたい」

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

CLOSE
クローズアップ
UP

「ワッソ」を 大阪ブランドに

プロフィール

Wasso NPO法人「大阪ワッソ文化交流協会」
初代事務局長

たな はし きよ はる
棚橋 清晴さん



1950年、岐阜県生まれ。高校卒業後、大手電機メーカーに就職。企画、サービス、営業、販売、海外戦略などの職務を経て、現在、社会貢献を担当。NPO法人「大阪ワッソ文化交流協会」事務局役員(初代事務局長)。

四天王寺ワッソ
日時:11/1(日) 10:30~17:00
会場:難波宮跡(地下鉄「谷町四丁目」)
ホームページ
<http://www.wasso.net/>